

吉見町山の根古墳の年代について

利根川 章 彦

1 はじめに

埼玉県立さきたま資料館では、平成元年度から平成5年度までの5か年間、埼玉県教育委員会が行った「埼玉県内古墳詳細分布調査」の実施機関として、学芸課が調査の実務に当たった。この間、筆者は平成4・5年度の2か年間、この調査事業の担当者の任にあり、最終年度に調査報告書刊行の大役を果たすこととなった。

小稿で取り扱う比企郡吉見町所在の山の根古墳は、平成元年度に墳形確認のための試掘・測量調査を実施した古墳であるため、筆者が直接調査に当たったのではないが、その調査の結果出土した土器によって、埼玉県域における古墳の出現について特筆に値する位置付けが可能な古墳であることが確実となった。この点については、調査報告書において若干触れておいたが（註1）、調査報告書刊行に与えられた期限や筆者の能力の限界などのため、私見を十分に述べる余裕がなかった。なお、年代については出土土器を根拠に「4世紀前葉頃」と位置付けてある。

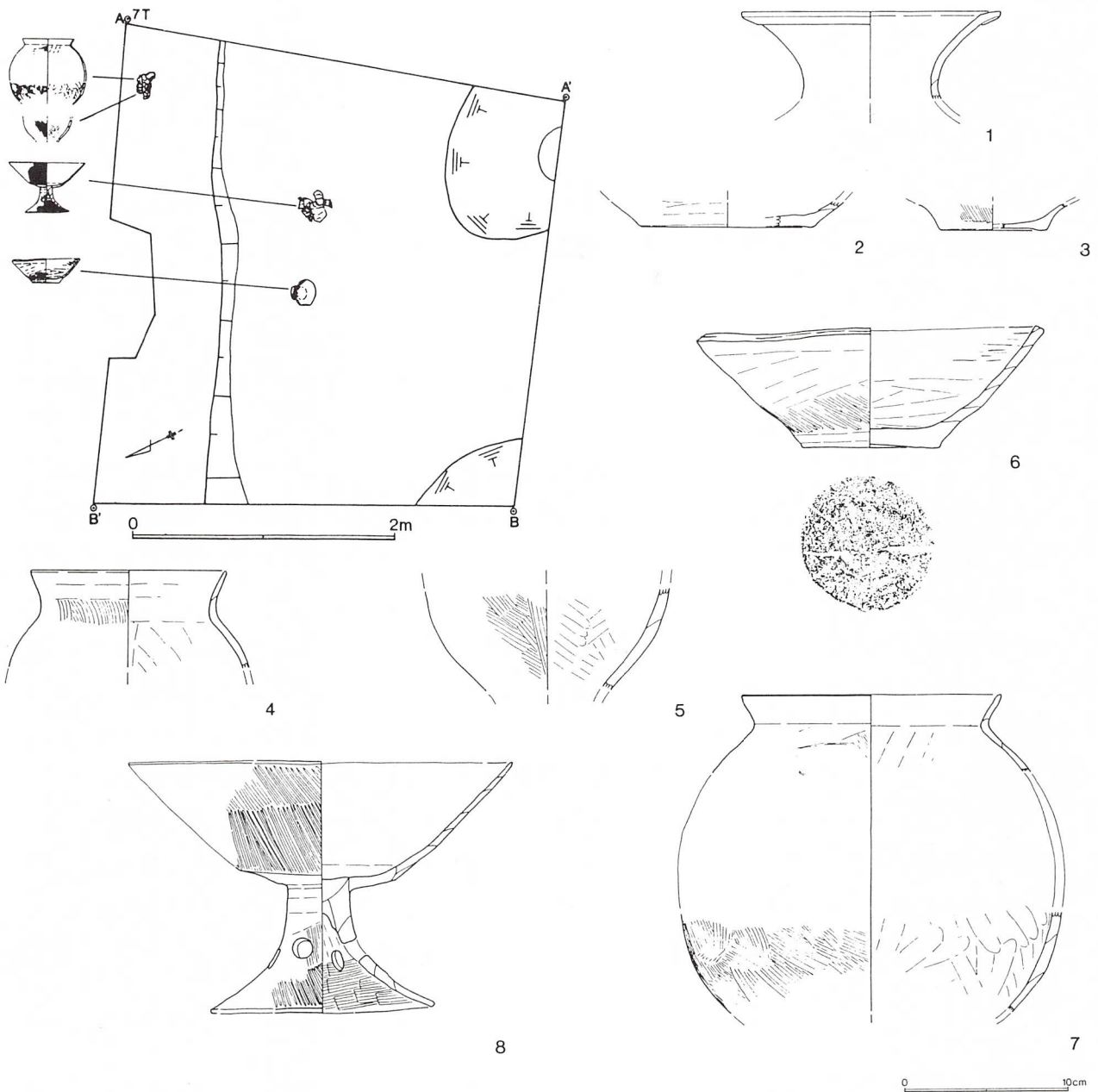
そこで、小稿においては、この古墳の位置付けを再度明確にするために出土土器を中心に古墳の検討を試みるものである。

2 古墳の概要

山の根古墳は、比企丘陵の最東端である吉見丘陵から派生する標高30m程の尾根上に所在する。所在地は埼玉県比企郡吉見町久米田五の耕地 746番地である（第1図）。この古墳は、尾根の先端部、南南西の方位に前方部を向けて築造されており、北西35mの位置には一辺25mの方墳である山の上2号墳がある。さらに2号墳の北西40m程にある円墳の3号墳とともに3基で、「山の上古墳群(山の根古墳群)」を構成している。

墳丘の保存状態は良好で、前方後方形をよく留めている。谷側にあたる後方部東墳丘部は自然の傾斜面を削り出しているほか、前方部も尾根先端の地形を利用して築造されている。墳丘測量は当館の調査以前に森達也氏（当時早稲田大学大学院、現愛知県陶磁資料館）らが行っていたので、調査報告書掲載を含めて利用させていただいている。記して深謝申し上げたい。

当館の調査は、墳丘各部に合計7本のトレンチを設定して、墳形を確認した。調査の実施期間は平成2年1月29日から2月13日まで、8日間を費した。調査の結果、墳丘の周囲には周堀が所在しないことが明らかになった。古墳の東側は丘陵斜面であるため、調査着手前に周堀が確認されないことは容易に予想されたが、墳丘西側の平坦面においても周堀は確認されず、墳丘盛り土を得るために白色粘土層まで削り出した地山整形面が確認されたのみであった。



第2図 山の根古墳出土土器と第7トレンチ平面図

墳丘裾部は、前方部前端の西側コーナーの部分では検出されなかったが、その他の6本のトレンチにおいては確認することができた。これによって、古墳の規模を計測すると、墳丘主軸方向の全長54.8m、後方部長33.6m、後方部幅26.2m、前方部長21.2m、前方部幅19.2m、墳丘の基底部からの高さは後方部側3m、前方部側1.9mとなる。ただし、墳丘は傾斜地にあるため、前方部と後方部の比高差は約3mということになる。したがって、前方部側からの見かけの墳丘の高さは5m程度ということになり、自然地形を利用して実際の盛り土量に比べて墳丘を高く見せようと工夫して築造されていることが判明した。平面形は、後方部の形態が縦長になるものであり、埼玉県内の前方後方墳・前方後方形周溝墓（註2）ではむしろ多い形態と考えられる。

出土遺物は決して多くはなかったが、土師器8点を図示することができた。器種の内訳は壺1・甕5・鉢1・高坏1である。このうち、甕4・鉢1・高坏1の6点は西側くびれ部に設定した第7トレンチから出土したものである。後方部のくびれ部付近の墳丘裾部平坦面に並べられていたもの

であろう。次章でこれらについて分析する。

3 山の根古墳出土土器の検討

山の根古墳から出土した土器は大半が甕であったが、完全に復原できたもの・完形品として出土したものは、鉢と高坏のみであった。個別に見ていくことにする。

壺（第2図1）は口縁部から頸部にかけての破片で、口縁部の外反度が大きく、口唇部は外側に薄く折り返される。いわゆる「折り返し口縁」の壺である。折り返しの幅は狭く、口唇部内面に稜があり、端部に向って細めて作る特徴がある。これはこの種の壺の中では新しい特徴であり、弥生時代の範疇に入らないことを示す。

甕は、4・5のように中・小型であり胴が張らないタイプと、7のように球形胴を持つ大形甕のタイプがある。底部は3が前者、2が後者であろう。4は頸部のくびれが弱く、口縁部がやや長めで、ゆるく外反する。7は口縁部自体は短い、強く「く」の字に折れるのが特徴である。4の形態はやや古いものの残存であり、7が普遍的と考えられる。器外面がハケ目、内面がヘラケズリ後ナデで調整される点など、古墳時代初頭の土器の特徴を示すものと言える。

鉢は、甕の底部から胴部下半までマキアゲで粘土を積み上げていき、そこで止めて上端をヘラ状工具で強くナデて面取りし、口唇部とする。底面は周縁部に薄く粘土を貼り付け、わずかな上げ底風になる。かつて都出比呂志氏が発案した「底部輪台技法」（註3）か、森岡秀人氏が検討した「ドーナツ状上げ底」（註4）にあたる。この技法も弥生時代末期頃関西から伝播すると思われる。

最後に高坏。坏部はやや深めで、外面下端に稜があり、口縁部は大きく外に広がる。脚部は、上半部が直立気味で、中位から下はゆるく「く」の字に折れて大きく開く。坏部の深さと脚の長さが拮抗しており、坏部径が脚裾径より幾分大きい。東海地域の元屋敷式土器の範疇に入る大型の有稜高坏である。五領式の（古）段階に対応するものである。

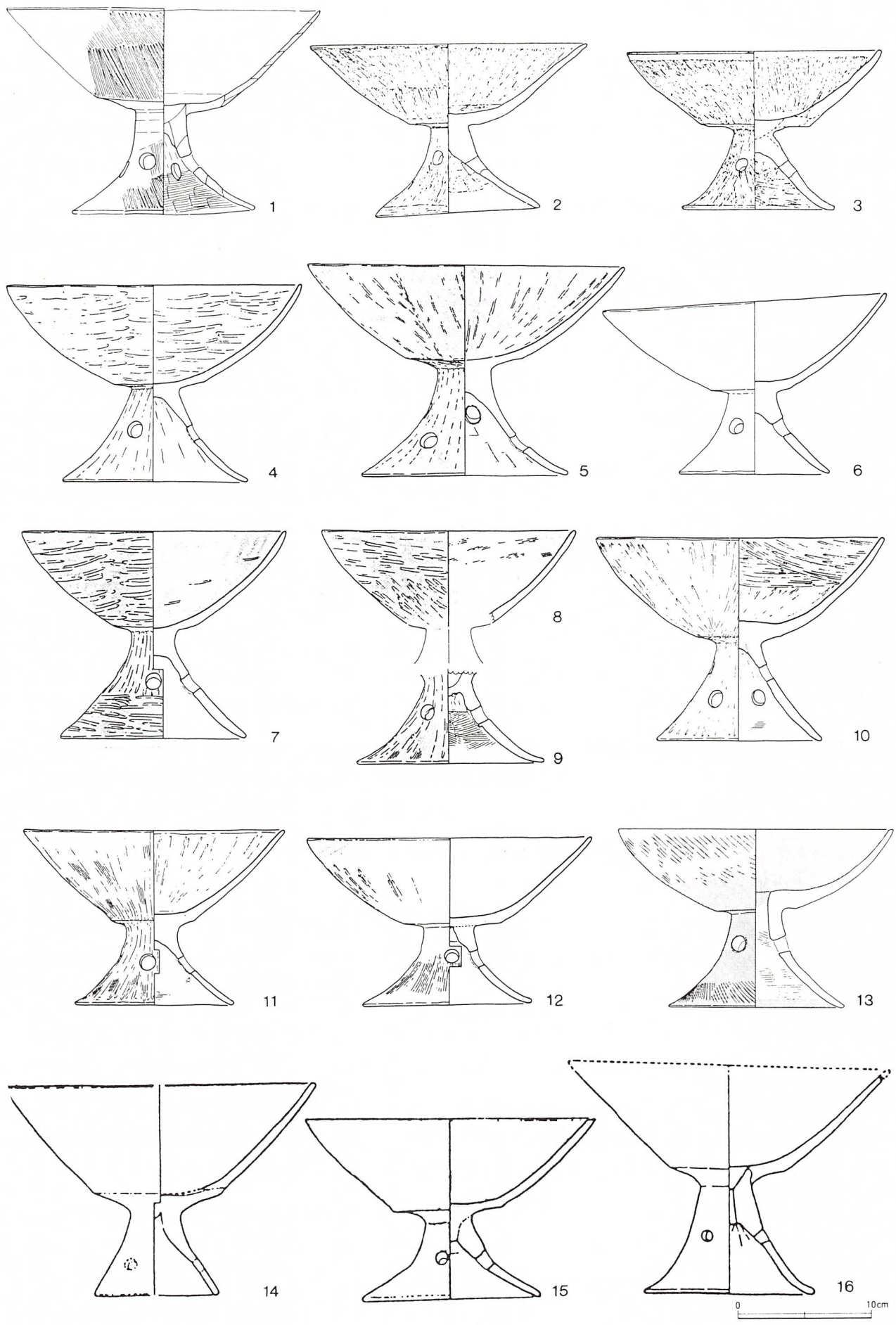
以上、古墳時代初頭の時期にあたるのは間違いないところであるが、より厳密にはどういう時期にあたるのか、もう少し考えてみたい。

4 年代の考定

前章で触れたように、山の根古墳出土土器は、五領式（古）段階に属することは確実であるが、広域的に各地の古式の古墳と比較するために重要な土器は、東海系の高坏（第1図8）である。ここでは各地の東海系高坏の出土例と比較検討してみよう。

山の根古墳の高坏の顕著な特徴は、大きな坏部と外開きになる脚部である。脚部に小孔が6個千鳥式に穿孔されることもこの器形の高坏には珍しい。むしろ千鳥式穿孔は、小型の坏部を持ち、脚裾部にパレススタイル系統の横線文・鋸歯文（ないし連弧文）を有する高坏に通見られる。

第3図には、県内出土の東海系高坏のうち、山の根例に近似するものを集成してみた。ただし、実際にすべてを集成するならば、この十数倍の数は優に存在するとみてよい。ここでは、方形周溝墓（前方後方形を含む）等に限って取り上げた。また、比較のために千葉県東葛飾郡沼南町北ノ作1号墳（註5）、市原市神門5・4・3号墳（註6）の高坏も図示している。もちろん、関東の他地域



第3図 東海系高杯の諸例

1. 山の根古墳 2・3. 東松山市下道添遺跡9号墓 4. 坂戸市中耕遺跡10号墓
 5・6. 中耕遺跡13号墓 7～9. 中耕遺跡26号墓 10・11. 中耕遺跡32号墓
 12. 中耕遺跡42号墓 13. 千葉県沼南町北ノ作1号墳 14. 市原市神門5号墳 15. 神門4号墳 16. 神門3号墳

においても、群馬県高崎市元島名將軍塚古墳（註7）、高崎市鈴ノ宮遺跡7号墓（註8）、栃木県佐野市馬門愛宕塚古墳（註9）、河内郡南河内町三王山南塚2号墳（註10）、那須郡小川町駒形大塚古墳（註11）など、山の根例に関連する資料は多数存在する。ここでは、必要最小限の資料しか取り上げないので、結論に偏りがあるというそしりを逃れられるものではないが、定量的分析は機会を改めることにして、先に進みたい。

山の根例に最も近い形態を示すのは坂戸市中耕遺跡13号墓（註12）の例（第3図5）である。脚部の天井を中実気味に埋めていること、坏部・脚部の高さ・径の比率、脚部の千鳥式穿孔とどれをとっても、山の根例同様の作りを示している。穿孔が通常形態になったものでは東松山市下道添遺跡9号墓（註13）の例をあげることかできる。いずれも脚部が中位でゆるやかに外に屈曲し大きく「ハ」の字に開く形態をとる。これに対して、山の根例よりやや古く位置付けられそうな中耕遺跡32号墓例（第3図10・11）は脚部の開きが小さく、新しくなる中耕遺跡42号墓例（第3図12）の場合は脚が寸詰まりになっている。この点から考えると、北ノ作1号墳例（第3図13）は山の根例とほぼ同じ時期になる可能性がある。また、神門古墳群の3基はいずれも坏部が深過ぎて比較が困難であるが、唯一3号墳例のみが山の根例の時期に相当し、5号墳・4号墳は先行する時期になるであろう。特に、5号墳は欠山式相当の時期に繰り上がるのが確実である。

さらに、東海地方の編年案等と比較してみよう。

近年では、愛知県西春日井郡清洲町廻間遺跡の調査報告を中心としたいわゆる「廻間編年」の優位の状況で研究が展開している。これは従来の欠山式・元屋敷式・石塚式（註14）を整理し直して、近畿地方との対応を正確に把握しようとしたものにほかならない（註15）。また、1993年秋の日本考古学協会新潟大会のシンポジウムにおいても、大会関係者・パネラーらによって北陸の加賀・能登地域を中心とした漆町遺跡の土器編年案（いわゆる「漆町編年」）と「廻間編年」の調整を取りながら、東日本全体の古墳時代初頭土器編年を確立しようという努力が重ねられたが、概ね対応関係は取ることができたと考えてよからう（註16）。

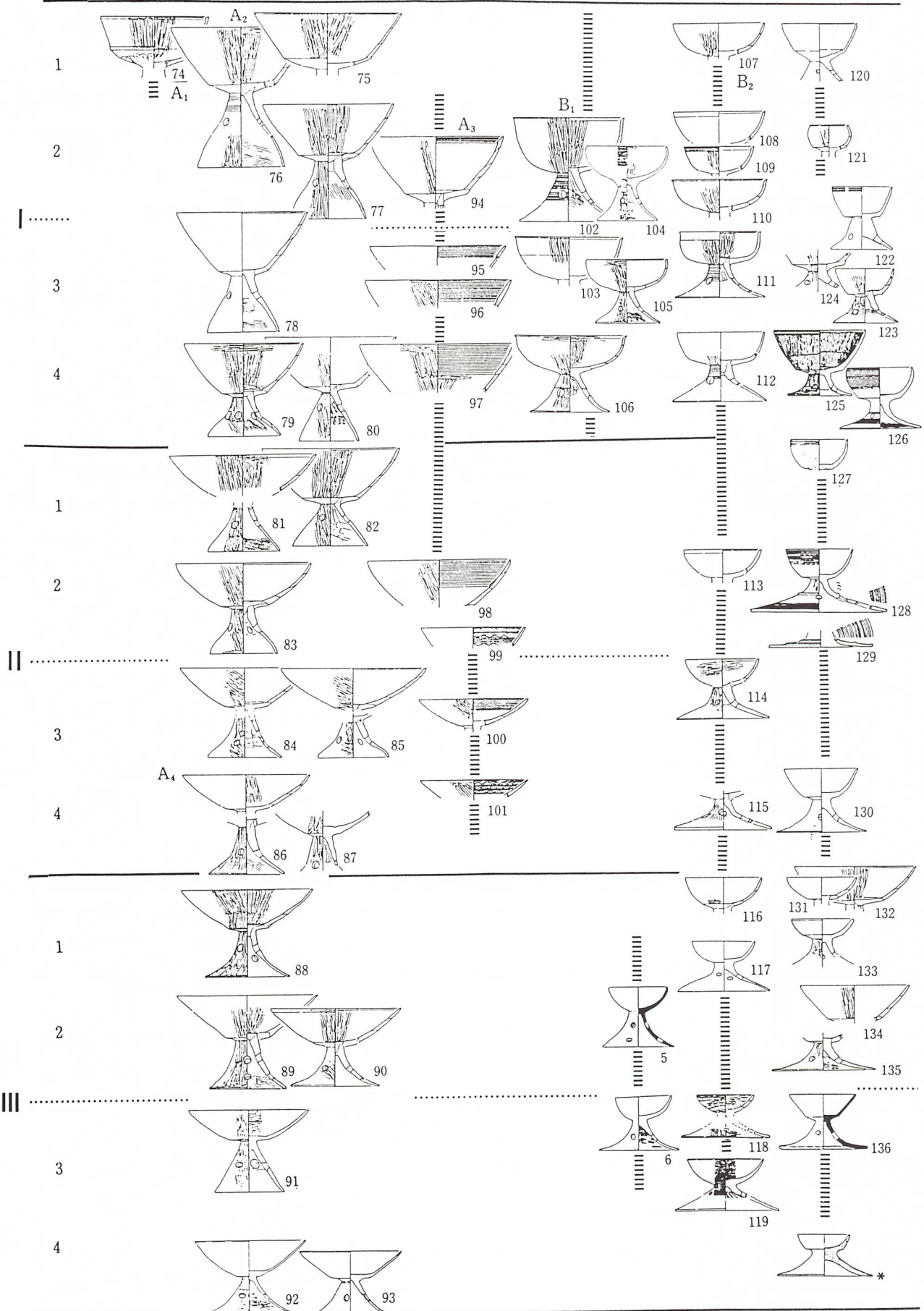
山の根例は、「廻間編年」の高坏の部分（第4図）に比較すると、脚裾部が大きく開く形態が定着し始める廻間Ⅱ式3段階以降の時期に相当するが、脚部千鳥式穿孔が増加する廻間Ⅲ式1段階に併行するとみたい。これは、布留式（古）段階の最初期（寺沢薫氏の布留0式）であるから、庄内式と布留式の境界にA. D. 300年を置く見解（註17）ならば、山の根古墳の年代は4世紀初頭あたりに置くことが許されよう。しかしながら、最近の弥生時代から古墳時代に関する九州年代（註18）を参考にする限り、この年代さえも3世紀代に繰り入れることが可能になってしまう。仮にもう1段階上げて、廻間Ⅱ式4段階にするならば、庄内式（新）段階の終末期（寺沢編年布留0式の範疇）として3世紀後半から末あたり、九州年代採用ならば確実に3世紀後半である。

最後に蛇足ながら、同様に神門古墳群も考えたい。5号墳は廻間Ⅱ式2段階よりは古くなりそうであり、廻間Ⅰ式4段階の可能性もある。坏部高が脚部高を上回ることからⅡ式1段階とみたい。4号墳は廻間Ⅱ式2～3段階である。3号墳は山の根古墳・北ノ作1号墳と同じ時期となろう。したがって、神門古墳群は3世紀後半（中葉の可能性もある）～4世紀初頭頃に展開した古墳群ということになる。

有段高杯

碗形高杯

有稜高杯



第4図 尾張地方の高杯の変遷 (赤塚 1990による)

また、従来年代的位置付けが新旧に二分されていた長野県松本市弘法山古墳にも出土品再整理によって東海系高坏を含む未報告の外来系土器が出土していることが判明した（註19）。これによって早晩年代は確定するかもしれないが、筆者の見るところ廻間Ⅱ式の2～4段階に相当する高坏が揃っていることや、手焙形土器・小型高坏の特徴などから廻間Ⅲ式1段階に下る可能性も残されている。パレススタイル壺や庄内式系装飾壺などの位置付けから総合的に判断すべきであろう。私見では、庄内式系装飾壺が布留式（古）段階いっぱい存続することを重視し、庄内式併行期に繰り上げるのは困難と判断しておきたい。

5 おわりに

少量の土器を根拠に、山の根古墳の年代を4世紀のごく初期、場合によっては3世紀代に繰り入れることも可能性の範囲であることを述べてきた。埼玉県最古の古墳という位置付けは不動のものになった感もあるが、何か重大な間違いを冒しているかもしれないという不安もよぎっている。

埼玉県県民部県史編さん室が調査した数基の古式古墳や「埼玉県古墳詳細分布調査」で調査した前期古墳の土器の出土例、さらに、江南町塩古墳群などでも古墳時代前期の壺などの出土例があり、埼玉県の前期段階の古墳を考える材料は、筆者が考古学に手を染めた20年前に比較すれば、飛躍的に増加したと言ってよい状況にある。

今後、小稿の補足をすべく肝に銘じて、擱筆することにした。

（註1）埼玉県教育委員会 1994 『埼玉県古墳詳細分布調査報告書』

なお、報告書の遺物の個別的考察は日高慎氏（筑波大学大学院）が行った。筆者の見解とは大きく異なる点はないが、年代に関する細かい記述については報告書全体の記述のバランスを損ないかねないため、あえて行っていない。

（註2）「前方後方墳」と「前方後方形周溝墓」の概念については、相容れないものとして、すべて「前方後方墳」としてしまう研究者も存在する（代表としては杉山晋作氏）。しかし低墳丘墓も確実に存在する上、方形周溝墓群の内部に同時存在しているため、小稿では「前方後方形周溝墓」概念も使用しておくことにする。主丘部（後方部）が3m以上に達する山の根古墳の場合は「前方後方墳」とすることは大方の研究者の見解が一致を見えると思うが、筆者がかつて調査した、児玉郡美里町村後遺跡方形周溝墓などの場合は発掘区の断面に残った盛り土痕跡から考えても本来の墳丘高が2m以上に達するものではなかった可能性が高く、「方形周溝墓」の延長線上にある遺構であることは確実である。

細田勝・利根川章彦 1984 『向田・権現塚・村後』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第38集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

（註3）都出比呂志 1974 「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究』第20巻第4号 考古学研究会

（註4）森岡秀人 1977 『河内長野大師山』 関西大学文学部考古学研究室

（註5）糸川道行 1994 『沼南町北ノ作1・2号墳発掘調査報告書』 千葉県文化財保護協会

北ノ作1・2号墳は1959・1960年にも「北作Ⅰ号墳」・「Ⅱ号墳」の名称により早稲田大学考古学研究室が調査しており、下記の報文も発行されている。

金子浩昌・中村恵次・市毛勲 1959 「千葉県東葛飾郡沼南村片山古墳群の調査」『古代』第33号 早稲田大学考古学会

中村恵次・市毛 勲他 1961 『印旛手賀』 早稲田大学考古学研究室

- (註6) 田中新史 1977 「市原市神門4号墳の出現とその系譜」『古代』第63号 早稲田大学考古学会
 田中新史 1984 「出現期古墳の理解と展望－東国神門五号墳の調査と関連して－」『古代』第77号 早稲田大学考古学会
 浅利幸一 1989 「神門3号墳」『市原市文化財センター年報』昭和62年度 市原市文化財センター
- (註7) 田口一郎 1981 『高崎市元島名將軍塚古墳』 高崎市教育委員会
- (註8) 飯塚恵子他 1978 『鈴ノ宮遺跡』 高崎市教育委員会
- (註9) 佐野市教育委員会・飯田土地改良区 1992 『馬門南遺跡・馬門愛宕塚古墳』
- (註10) 斉藤光利 1993 「三王山南塚1・2号墳」『シンポジウム2 東日本における古墳出現過程の再検討』 日本考古学協会新潟大会実行委員会
- (註11) 三木文雄編 1990 『那須駒形大塚』(吉川弘文館・刊)
- (註12) 杉崎茂樹他 1994 『中耕遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第125集 埼玉県埋蔵文化調査事業団
- (註13) 坂野和信 1987 『下道添遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第67集 埼玉県埋蔵文化調査事業団
- (註14) 大参義一氏は「欠山期」・「元屋敷期」・「石塚期」と呼称していた。
 大参義一 1968 「弥生式土器から土師器へ」『名古屋大学文学部研究論集』X L VII
- (註15) 赤塚次郎 1990 『廻間遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター報告書第10集 愛知県埋蔵文化財センター
- (註16) 甘粕健・春日真実編 1994 『東日本の古墳の出現』(山川出版社・刊)
- (註17) 都出比呂志 1982 「前期古墳の新古と年代論」『考古学雑誌』第67巻第4号 日本考古学会
- (註18) 柳田康雄 1982 「三・四世紀の土器と鏡」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』下巻
- (註19) 直井雅尚 1993 『弘法山古墳出土遺物の再整理』 松本市教育委員会

この報文の18～21ページに示された各地の編年の対応関係のうち畿内のものとして「纏向編年」と「矢部編年」の対応が示されているが、「纏向編年」の関川尚功氏と「矢部編年」の寺沢薫氏の庄内式・布留式の認定の問題には深刻な対立があるためか、小稿32ページに引いた(註16)文献所収の対応表では庄内式・布留式とも両氏の編年以前のものにもどしている。筆者も寺沢氏の「布留0式」には懐疑的なので、小稿本文中には旧来の庄内式・布留式の理解を採用している。

新潟 シンポ 編年	東北	関東北部	関東南部		東海	中部高地		北陸北東部	北陸南西部		畿内		
			東京湾 西岸 東京		赤塚 (1990)	信濃 千野 (1993)	青木・ 宇賀神 (1993)	甲斐	坂井・川村 (1993)	田嶋試案 (加賀地域)		漆町編年 田嶋 (1986)	
1			I	1	山中式後期	V-3		1期		1期	前	1群	
2				I b						0	V-4		
3				2	廻間 I	1			3期	前		古新	(+) 3群
4		I期		3						廻間 II	2		
5	I-1	II期(古)	II	3	1	V-5		3期	II-1				I a
6	I-2	II期(新)								4	2	御屋敷	
7	II-1	III期(古)	III	5	3		II	5期	III	2			I
8	II-2												
9	III-1	III期(新)		b	松河戸式前期					I ₂	10群		
10	III-2	IV期		6									
	III-3												

第1表 弥生時代から古墳時代の土器編年の広域比較 (甘粕・春日編 1994による)